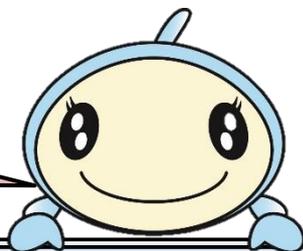


第2号
R4. 4月



「3つの合言葉」元気・学び・会話



【発行・編集】
滑川町教育委員会
TEL0493-56-6907

町の子供は町で育てる 滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ -チーム滑川での教育-」

コロナ禍で得たもの、失ったもの

「コロナ禍で得たもの、失ったもの」を題材にした様々な記事を見かけます。その意見は多種多様で、立場や視点によって違うことも理解ができます。このような中、学校において得られたものの一つが、子供1人1台のタブレットPCです。コロナ禍でGIGAスクール構想が前倒しになり、昨年度に配置しました。

このような状況の中、文部科学省は現状の新型コロナウイルスの感染リスクを踏まえ、学校教育の対面指導とオンライン授業の関係等の課題や問題を整理しました。資料によると、「感染症が収束していない**「With コロナ」段階**では、教師による対面指導とオンラインとの組み合わせによる新しい教育様式を実践する一方、感染症が収束した**「ポストコロナ」段階**では、教師が対面指導と家庭や地域社会と連携したオンライン教育を使いこなし、ハイブリッド化した形で協働的な学びを展開する姿を示しています。これは、コロナ禍の現状を踏まえて、今後の教育の方向性を提示する理に適ったものと考えられます。

一方、子供たちの学校園での様子を見てみると、この2年間で培われてこなかった部分もあるように思います。例えば、マスクをしていることや対面の制限により表情や雰囲気**「感じ取る」ことが失われてきている**ように思います。日本文化では、周りの人々との協調性が重要と考えられてきたため、思った内容をはっきりと言葉にする習慣が少ない分、相手の表情や声のトーンなどの様子から考えを察します。そのことが、感染防止対策のため、育まれなかったように感じます。また、日本文化が持つ独特の自然観は、自然と調和する中で培われました。このことも外出の制限や密を避けることから、失われつつあるように思います。

「劇団風の子」(1950年に発足し、全国で公演を続けている劇団)の大潤弘幸代表は、「**子供の時にどんなものに出会っているのかは、その後の人生でとても大事になってくると思うんです**。人の息づかいや汗、生の声を聞くことは、子供たちが表現や発信をしていく上で、きっといいものになる。演劇や芸術といった“文化”は、その人間を支える背骨であるんじゃないかなって思います。その背骨を作っているんだと僕は自負して、70年やってきているんです」と述べています。

また、昭和22年に施行された日本国憲法の条文の作成に尽力した法律の専門家の鈴木義男氏は、「人間が動物と違うところは、芸術を楽しむ、社交を楽しむ、読書や修養につとめる、つまり文化を享受し、人格価値を高めるところにある。故に生存権というのは、人間に値する文化的生存ということである」と述べています。

さらに、静岡文化芸術大学 中村美帆准教授は、「大人だと、“直接”に代わるものをオンラインで探することができますが、子供の場合は難しいし、失われたこと自体にすら、なかなか自分で気づけないかもしれない。その意味では、文化的なものが失われた時の影響は子供のほうが大きいと思います。**次世代を担う子供たちが、文化的な体験からいろいろなことを吸収していく過程が失われると、将来的にも影響が出てしまうのではないかと心配です**」とも述べています。

コロナ禍の今だからこそ、失われがちな“文化”に思いをはせ、大人の役割として日本のよき伝統文化や皆さんが作ってきた「文化的な環境」を改めて見直して見る必要性を強く感じます。



「本は友達」を合言葉に

町立図書館では一人でも多くの方々に来館していただくように色々な機会を積極的に啓発をしております。言葉や文章に親しむことは、確かな言語力と豊かな想像力を育みます。「本は友達」!身近に本がある生活を楽しみましょう。

ゲーム時間・スマホ時間・読書時間

私たちの生活の中で、間違いなく公平なものは、誰にでも1日24時間あるということです。24時間から睡眠時間、学校の時間や仕事の時間、食事の時間、入浴の時間など、どうしても必要な時間を差し引くと自由になる時間はどれくらいあるのでしょうか。使えるこの時間をどう使うかが充実した生活のために重要なポイントです。ゲームやスマホにだけ偏っていませんか。読書を通して自分の知力や言語力を総動員して文章に込められたメッセージと対面することから、「読書の醍醐味」が生まれます。ご家族それぞれが自分のスマホの画面を見つめるのか、みんなで同じテレビ番組を見るのか、自分が読んだ本を話題したり、読むことを勧めたりするのか。余暇時間をどう過ごすかは長い人生を実のあるものにするためにとても大切なことです。ご家族でも話題にしてみたらいかがでしょう。

エコミュージアムセンターでは現在、ミヤコタナゴの人工繁殖を実施しています。

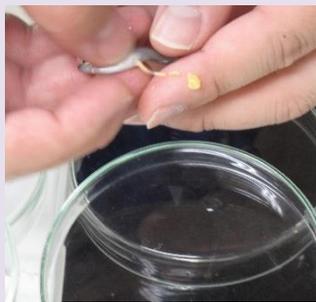
ミヤコタナゴは3月～7月頃にかけて産卵の時期を迎えます。自然の中ではマツカサガイなどの淡水に棲む二枚貝にメスが産卵管と呼ばれる管を差し込み産卵しますが、エコミュージアムセンターではメスの伸びた産卵管から人の手で卵を絞り出し、繁殖を行っています。

採取した卵は2日ほどで孵化し、オタマジャクシのように尻尾が生えて泳ぎだします。2週間ほど経つと体の各部位ができてきて魚の形になり、食事や浮袋に空気を取り込むために浮上してきます。エコミュージアムセンターでは、この人工繁殖の様子を毎年3月下旬頃～4月末頃まで見ることができます。

また、生後50日が経過した稚魚を展示しています。



ミヤコタナゴ人工繁殖中



メスから卵を採取



採取した卵



2週間後の稚魚



2日後の孵化状態

「いつまでもミヤコタナゴの棲める町」を目指して、いろいろな事業を推進していきます。

